

## 「青年農業者と東北農政局との意見交換会」概要

日 時：令和4年10月13日（木）13:30～16:00

場 所：仙台合同庁舎A棟 7階会議室

出席者：青森県青年農業者 有限会社奈良岡ファーム 取締役 奈良岡 拓志 氏  
岩手県青年農業者 マルタカリんご農園 園主 高橋 真樹 氏  
宮城県青年農業者 大沼農園 園主 大沼 ほのか 氏  
秋田県青年農業者 合同会社久保井ファーム 代表社員 久保井 優司 氏  
山形県青年農業者 佐藤 恵 氏  
福島県青年農業者 佐藤 拓也 氏、佐藤 遥香 氏  
東北農政局 坂本局長、清野次長、原次長、林田企画調整室長、  
稲葉生産部長、吉永経営・事業支援部長 他

### 概 要：

意見交換会では、東北地域の青年農業者7名から、自身の農業経営の特徴や取組について紹介してもらうとともに、会のテーマとした①農業を通じた魅力ある地域づくりの取組、②次世代を担う農業者を地域に定着させるための方策等について、東北農政局幹部との意見交換を行いました。

開会に当たり、東北農政局 坂本局長から、『少子高齢化に伴い、国内市場が縮小する一方、不安定な国際情勢の影響を受けた国産ニーズの高まりや、世界的な人口増加による海外市場の拡大が予想される。また、SDGs に代表される環境との調和を踏まえた持続可能な農業の確立が今後重要となっており、そのためには、担い手である「ひと」の育成が大変重要である』との発言がありました。



## 1 自身の農業経営等について

### <奈良岡 拓志 氏>

- ◆ 青森県営農大学校を卒業後、アメリカで1年半果樹栽培を学び、父親が社長を務める奈良岡ファーム（青森県藤崎町）に平成24年就農した。現在、取締役を務める。
- ◆ りんご、にんにく、水稻を栽培。りんごは主に直接販売や郵便局のふるさとパックとして、にんにくは加工品として販売。水稻は今後も面積を拡大していく予定。



### <高橋 真樹 氏>

- ◆ マルタカリんご農園（個人農園）の園主をしている。大学卒業後、岩手県内の農業生産法人での雇用就農を経て、親元就農し、りんご栽培を継承。
- ◆ 無人販売や産直を意識し、ふじ等を主力品種に24種類を栽培。青果のほか、ジュースやゼリーなどの加工品も手がけ、地元のパン屋等で販売。

### <大沼 ほのか 氏>

- ◆ 宮城県農業大学校での農業研修後、令和3年に宮城県南三陸町入谷地区にて独立自営就農。就農するに当たって、農業大学校時代に研修を受けた先輩農業者から農地を紹介してもらった。現在もその方を師匠と仰いで、技術指導や農業機械を借りるなど大変お世話になっている。
- ◆ もも、かぼちゃ等の野菜、ブルーベリー、くり等を栽培。平日は農作業を行い、主に産直で販売するほか、休日は自身や地域の農業者が栽培した農産物を使用し、キッチンカーでクレープの移動販売を実施。令和6～7年までに、観光農園とカフェを開設することが目標。

### <久保井 優司 氏>

- ◆ 秋田県能代市にある久保井ファームの代表社員を務めている。平成24年に東京から、妻の地元である能代市に移住。県内の農事組合法人にて2年間研修を受けた後、平成26年に独立自営就農。
- ◆ ねぎとキャベツを栽培。ねぎは、補助事業を活用して栽培面積を順次拡大。デイワーク等のアプリを活用して、労働力の確保を図っている。

### <佐藤 恵 氏>

- ◆ 令和3年4月に独立自営就農。関東地域で働いていた際、地元から送られてきた野菜のおいしさに感動したことが就農を目指すきっかけとなった。
- ◆ ハウス2棟で、ミニトマト、ほうれんそう、にらを栽培。山形大学主催の「食と農のビジネス塾」において作成した営農計画書をもとに農業経営を進めており、家族経営で可能な規模で利益は最大となるよう目指している。



### <佐藤 拓也、遥香 氏>

- ◆ 自身（拓也氏）の祖父が亡くなって、管理していた農地が荒れてしまったことをきっかけに就農を考えるようになり、東京での仕事を辞め、妻を連れ福島県にUターン。
- ◆ 新農業人フェアに参加し、福島県国見町にある農業研修施設「くにみ農業ビジネス訓練所」を知ったことをきっかけに、妻とともに同訓練所で1年間の研修を受け、令和4年4月に福島県伊達市にて新規就農。
- ◆ 伊達市が日本一の産地である夏秋きゅうりと、先輩農業者から指導を受けたとうもろこしを栽培し、道の駅等で販売。今後、ももやぶどうなどの果樹を栽培する予定。
- ◆ 夫婦で、くにみ農業ビジネス訓練所のOB会である「あつかし農友会」に参加し、先輩農業者との情報交換や機械の貸し借り、マルシェの開催等を行うほか、遥香氏は福島県県北エリアの一部女性農業者同士で交流し、横のつながりを広げている。



## 2 農業を通じた魅力ある地域づくりの推進について

### <高橋 真樹 氏>

- ◆ 奥州市協働のまちづくりアカデミーの3期生として参加したことが縁で、地域の団体が交流できる「奥州つながるフェス」の事前準備に協力している。こういった地域での交流のお陰で、パン屋とのコラボ商品にりんごを使ってもらえることになった。農業以外の人との交流が視野を広げてくれる。

### <大沼 ほのか 氏>

- ◆ 地区内の幅広い年齢層の女性で結成するグループ「ビーンズクラブ」に参加し、耕作放棄地となった水田で大豆や枝豆などを栽培し、JA及び個人に販売している。
- ◆ ビーンズクラブのような、小規模でも心から農業を楽しんでいる組織が地域に数多くあれば、その姿を見て地域は活性化すると思う。



### <久保井 優司 氏>

- ◆ JA全農あきた管内では、園芸メガ団地の整備を推進しており、若手農家を中心としたネットワーク型メガ団地の取組に参加。機械の共同購入や、堆肥散布、耕起等の共同作業を行っている。
- ◆ 地域では、高齢化が進んでおり、担い手がおらず困っている農業者がいるため、栽培は各農家に任せて、出荷調整を請け負っている。後継者がいない農業者も助けていき、地域農業の衰退を防ぎたい。

### 3 次世代を担う農業者を地域に定着させるための方策等について

#### <奈良岡 拓志 氏>

- ◆ 自身も多くの人と出会い相談し、支援してもらった経験から、相談相手が近くにいることが重要だと考えている。現在、青森県の農業青年クラブ（4Hクラブ）の会長を務めており、「青森県農業青年交流会」を例年実施しているが、大会成功の目的のために、同じ時間を過ごすことで、信頼して相談できる仲間に恵まれた。

#### <高橋 真樹 氏>

- ◆ 日本では「農業」と「食」の概念的な結びつきが弱く、若い世代では、農業への関心が高まっているものの、食に対する関心が育っていないと感じているので、農業と食を結びつける「食育」が重要だと考える。
- ◆ 農業者に対する支援は、次世代と現役世代をあまり分けて考えなくてよいと思う。また、作目や経営規模等に合った形を選択できるような、柔軟で視野の広い支援を希望する。



#### <大沼 ほのか 氏>

- ◆ 新規就農時には、営農に関して何でも相談できる人が地域にいると心強い。
- ◆ 親子の収穫体験など、実際に土に触れる機会を提供することで、「農業っておもしろい」と感じる人が増えていくと思う。

#### <久保井 優司 氏>

- ◆ 就農当初は経営面積も少なく、比較的小型の機械を使用していたが、経営規模が拡大するにつれて最初に導入した機械が必要なくなり、無駄になってしまった。農地と作業舎、最低限の機械が用意された実践農場で、3～5年間研修できれば、その間に営農知識や独立資金の確保が行われると思う。
- ◆ 農業インターンシップを積極的に受け入れて、地域に定着させていくことが必要だと考えている。自身も独立前に2年間農業研修を受けたが、その2年間で営農に関する知識が全て得られた訳でなく、就農後に地域の仲間やJAの指導員に相談したことが役に立ったので、そういった環境が必要だと思う。



#### <佐藤 恵 氏>

- ◆ 就農に当たっては、国の支援があるからこそ、新規就農者もその支援に応えようとやる気になると思うので、引き続き支援を続けてもらいたい。
- ◆ 就農時にギャップを感じて営農を継続できない人がいるため、農業研修施設等で実践的な農業を経験すると良いのではないかと。また、雇用就農から独立自営就農

する際には、農地等を「のれん分け」する仕組みがあると良い。

- ◆ 離農者と新規就農者間の農地継承等を、行政が仲立ちする仕組みが重要。

<佐藤 拓也、遥香 氏>

- ◆ 福島県国見町の「くにみ農業ビジネス訓練所」にて無償で研修を受け、1年間を通して先輩農業者の方に指導いただいた。研修中は、実際の農作業スケジュールを体験することができ、就農後も研修所OB等の繋がりで、営農に関する相談や機械の貸し借りができており、こうした農業研修施設があると良い。
- ◆ 国見町役場の方が、訓練所の副所長になっているので、農業次世代人材投資事業の申請や青年等就農計画の作成に関しては助言をいただいた。また、国見町在住の同期2人は、空き家を紹介してもらいリフォーム助成を受けたりしている。

## その他の意見・要望として

<高橋 真樹 氏>

- ◆ 農業機械の開発の際には、試験研究機関やメーカー等に農家が直接要望を出して検討できる場があると良い。また、試験研究機関や、農業機械メーカー・農薬メーカー等にも支援をすることで、今ある機械が安くなったり、もっと扱いやすい農薬が開発されたりすれば、農業全体の“やりやすさ”に繋がると思うので、農家個人への助成だけでなく広い視野での支援もお願いしたい。

<久保井 優司 氏>

- ◆ 中国等から加工用ねぎ・キャベツが低価格で輸入されている。国内にも十分に供給できる産地があるので、国内の産地維持対策を進めてほしい。
- ◆ 東北地域では冬期の農作業がないため、通年雇用が難しい。さらに、最低賃金が上昇するだけでなく、肥料・農薬等の生産資材も値上がりしている。販売価格は市場価格に委ねているが、国として何か対策をお願いしたい。

<佐藤 恵 氏>

- ◆ ほとんどの補助事業で、交付対象者は認定新規就農者であることが要件となっている。4月に就農を予定していて農業研修を行っている人が、申請段階では、認定新規就農者でないことから、4月から就農しても補助金をすぐに受け取れないといったケースを聞いているので、もっと農業者にとって柔軟な対応をしてほしい。

<佐藤 拓也、遥香 氏>

- ◆ 今年から始まった新規就農者育成総合対策のうち経営発展支援事業でトラクター及び防除機を導入予定だったが、メインで育てている野菜の収穫期までに導入が間に合わなかったため、早期に導入できるようにしてほしい。

最後に、東北農政局 原次長から、「自身は 10 年程前に約 5 年間、新規就農施策を担当していた。当初は、雇用対策として農の雇用事業から始まり、現在は就農準備資金、経営開始資金となっているが、平成 24 年から開始した青年就農給付金事業は、財源のない中、予算確保に苦労した。これらの予算を、皆さんタイミングは異なるが、就農時の経営安定及び技術定着に活用していただきありがたいと思う。」との感謝が示された。

また、「皆さんには、地域の中心的な担い手として、これからの経営発展を期待するとともに、新規就農者の皆さんには、地域に定着し、活躍されることを期待している。今後も、情報、相談等があれば、引き続きよろしくお願ひしたい。」との挨拶をもって閉会とした。

—以上—

